

さらなる高みを目指す2年間に

私は、「将来、地元で地方公務員となり、地域振興に関わる仕事がしたい。」という考えをもち、その研究のために大学院進学を大学3年生の秋頃から考えていました。現時点で大学院では、「分断された地域の状況を再構成する手段に里山がなるのではないか」という内容の研究をしたいと考えています。大学院では、大学生時代以上に専門的な内容を深く学ぶことが出来ます。講義内でも、実際の現場で研究したり、先生や院生たちと議論をすることで多面的に物事を考える力を磨けます。私は2年間で、自分自身の能力を伸ばし、将来は行政の立場から様々な事象に柔軟に対応できる人物として成長できるよう悔いのない日々を歩んでいきたいと考えています。



国際学研究科 国際学専攻修士課程 1年
森 啓修 さん

■国際学専攻修士課程授業科目の概要

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
国際学総論	林、阿野 井上、奥田 海津、小島 椎野、菅原 高井、宮原 山口、山田 山脇、渡邊	21世紀に入ってから国際社会は、ヒト、モノ、情報、資金などの流れが速くなり、大きな構造変化を生じている。また、中国などの新興勢力の勃興は、国際政治の力関係を大きく変えることにつながり、流動化と混迷が深まっている。本授業は、このような国際環境の変化が「国際社会」「市民社会」「国際協力」「国際観光」の分野でどのような構造変化が表れてきているかを考える。 (オムニバス形式／全15回)
国際関係論特論	林 薫 渡邊 暁子	現在の国際関係を特に貧困と格差の問題から考える。19世紀以降、全世界的には経済が発展するなかで絶対的貧困層と言われる人々が取り残されてきたのか、その原因を分析するとともに、戦後行われていた「援助」というスキームが有効かどうかを考える。オムニバス形式により、各講師が前半と後半でわかれて授業を行う。 (オムニバス形式 全15回)
市民社会・ガバナンス特論	椎野 信雄 山田 修嗣	現代社会を検討する際には、「市民」の概念化とその多様性、ならびに、「市民」の行動の領域・内容・意義が（再）検討されなければならない。授業はこの目的のために、「市民社会」と「ガバナンス」というキーワードを検討の軸に設定する。オムニバス形式の開講とし、担当者が各回、専門的分析視点を提示した後、受講者どうしの話し合いにより検討を進める。とくに、「市民」の一部に含まれるはずの「私」の観点を相互にぶつけ合い、現実的な解を求めることを到達目標とする。 (オムニバス形式 全15回)
多文化交流特論	山脇 千賀子	現代社会を特徴づけるグローバリゼーションとともに生起する諸問題において、「文化」が果たす役割について批判的な考察をするための基本的な概念の修得を目的とする。そのために、まずはグローバリゼーションを植民地主義・帝国主義・近代国民国家体制の普及という歴史的な脈絡の中で理解することを目指す。さらに、歴史的な脈絡を超えて、現代世界における多文化間での接触・衝突・交流をどのように理解することができるのか、社会学・文化人類学などの文化に関する学問分野における先行研究での議論を紹介しながら、受講生とともにディスカッションを行う。
国際協力特論	林 薫	開発途上国において実施されるプロジェクトあるいはプログラムの計画・立案、監理、評価の実践的スキルを学ぶ。援助における成果の重視、マクロの経済計画、貧困削減戦略文書（PRSP）、セクターワイドアプローチ、財政支援とプロジェクト支援、参加型・分権的手法の導入などの現在の世界的動向を踏まえて、案件形成、事前評価、モニタリング、事後評価などの定量的、定性的手法を習得する。特に、コンピュータを使用した費用便益の実習を行う。履修者がNGO、コンサルタントあるいは援助機関の職員として実際のプロジェクトに携わるために必要なスキルを身に付けることを達成目標とする。
地域計画特論	海津 ゆりえ 山田 修嗣 林 薫 井上 由佳	地域計画が対象とする人々の生活環境は、空間そのものや施設や交通などのいわゆるハード（構造物）と、サービスや産業などの諸活動や交流、教育などのソフトとが動的に作用しあうことによって作り出され、時代とともに変わりゆく。本授業は今日の地域づくりにおける計画設計の思想と技術を習得することを目的とする。オムニバス形式による開講とし、各講師が専門とする分野に基づく複数の分野を題材とした講義を行う。 (オムニバス形式 全15回)
国際ツーリズム特論	高井 典子	国際ツーリズムはその経済波及効果により、国や地域に恩恵をもたらす、自国への誇りと愛着を醸成する、といったポジティブな影響がある。その一方で、自然環境の破壊や固有の文化の急速な変容、貧富の差の拡大などの新たな課題を生み出していることについて、我々は自覚的であればならない。本授業では、より望ましい国際ツーリズムのあり方-サステナブル・ツーリズム-の方法論・実践論に向けての基礎知識を習得するために、その構造を多面的に把握し批判的に考察したい。
開発と貧困特論	奥田 孝晴	「飢え」と「貧困」からの解放は人類史上、いまだ達成されていない目標の一つです。この講座では、特に第三世界と呼ばれている国々あるいは地域の低開発問題を、おもに開発経済学の学知に基づき説明していきます。扱う内容は、第三世界における人口問題、食糧生産の可能性、「二重経済モデル」を駆使した人口吸引モデル、スラムの問題、工業化戦略など開発経済学の主要分野を網羅して講義していきます。

やりたいことを見つけるきっかけ

私は中国の大学で日本語を学んでいました。教科書やテレビなどで知っていた日本のことを自分の目で確かめたいという気持ちを持って、日本へ留学してまいりました。大学院では中国における地域特産品の保護について研究したいと思い、まず文教大学国際観光学科の研究生として入学し、半年間、専門知識を勉強しました。この勉強で、自分が取り組みたい研究内容も明らかになり、現在は「エコツーリズム分野」にも興味を持つようになりました。「一生をかけて取り組みたいと思える分野」にもやっと巡り合うことができました。現在、大学院に入り、先生方や院生仲間との議論、調査などを通して、様々な見方や知識を学ぶことができ、楽しくて充実した毎日を過ごしています。



国際学研究所 国際学専攻修士課程 1年
王 彤彤 さん

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
開発人類学特論	渡邊 暁子	開発人類学は、文化の視点から途上国の開発問題に「実践的」に関与する人類学の一領域である。本授業では、1960年代以降に開発主義政策をすすめてきた「途上国」を対象に、「開発される側」に置かれてきた周縁世界の人びとに焦点を当てることによって、先進国の人々が陥りがちな開発観のバイアスや、さまざまな開発のかたち、人びとの多様な生き方および考え方について理解していく。
平和とグローバルガバナンス特論	渡部 真由美	グローバル化が進む現代において、「新しい秩序」とは何を意味するのか。直接的暴力のみならず構造的暴力が複雑に混在する現代社会において、その要因を深く議論する場を提供することは、国際社会の一員である自覚と責任について再確認することにつながる。本授業では、身近なニュースから国際問題まで様々なケーススタディに言及しながら、グローバルアクター（国家、非国家組織、国際機関、企業、メディア、市民社会組織等）がどのような役割を果たしながら世界の課題に取り組んできたのかを分析し、未来の平和の在り方を模索する。
情報デザイン特論	黛 陽子	情報デザインとは、情報活用能力をもとに、情報を利用する人の活動の中に問題を発見し、それらを解決するための方法や手順を設計し、解決案を提示する一連の活動を含むものとされる。本講義では、従来の情報デザイン論の基礎的考え方を学ぶことに始まり、ロバート・ヤコブソンの「情報デザイン原論」の抄読へ進め、情報デザインの多面的な研究事例を学ぶ。事例では、人間のセンスメイキング（認識・理解）の特性に配慮した人間中心のデザイン方法等について主に触れる。これは、修士論文では図表の表現の仕方の学習に活かされ、就職対策としては情報提供業務における基本的な知識に役立つことを意図している。
国際経済・国際金融特論	菅原 周一	世界同時金融危機から、人々は多くの教訓を得て、金融危機、経済危機の再発防止策や再発時の対処方法が検討され、実践されている。一方で、富の格差から生じる現在の資本主義に関する問題点が指摘されるなど、解決されるべき課題も数多く残されている。本授業では、これらの現状を踏まえ、金融危機を多面的に捉えるとともに、富や教育の格差が新たな格差を生む現状をファイナンスの立場から整理、検討する。
国際協力NGO特論	渡部 真由美	いま、めざましい勢いで国際社会に台頭する国際協力NGO。本授業ではその基本的概念、各国・各地域におけるNGOの存在意義、またそれらの発展と変遷を多角的に検討する。基本的には講義形式で授業を進めるが、国際協力の現場で実際に起きたケースを用いながら、さまざまな環境の中で進めるプロジェクト形成の基本的原則、そしてそのマネージメントを学ぶ。NGOやNPO、そして国連、またCSR活動を積極的に推進する企業に興味がある学生に現在それぞれが直面する課題と展望を提示し、より現場に近い知識・情報、そして心構えを共に考える授業を目指す。
地域研究特論	宮原 辰夫	グローバル化に伴い、アジアの経済成長は著しい。とくに東南アジアにおいて、国境を越えた新しい経済圏が形成されつつある。その一方で、地域主義も高まり、宗教・文化を中心に自国アイデンティティの模索も強まっている。こうした動きは日本国内の産業や企業にも大きな影響を与えつつある。本授業では、アジア地域（とくに東南アジア、南アジア）の観光産業に焦点をあて、グローバル化に伴う経済発展と地域主義の高まりに伴う自国アイデンティティの広がりという二つの軸を通して、アジア地域の観光産業のありようを分析する。
ジェンダーと教育特論	椎野 信雄	脱近代社会としての欧米諸国のジェンダー平等状況を理解することを通して、「ジェンダーと教育」の問題を、国際社会における人権とセクシュアリティの現状を認識することで、検討できるようにする。キーワードである「ジェンダー」「教育」「人権」「セクシュアリティ」の概念理解を深めて、問題把握できるようになっていく。補助線として、グローバルイゼーションとシティズンシップ教育を引いてみる。到達目標は、国際社会におけるシティズンシップ教育の視点で、セクシュアル・マイノリティ問題を考察できるようになることである。
地域文化マネジメント特論	井上 由佳	「文化」とは有史以降、人間が常に向き合い、そして発展させてきた営みである。人によっては、文化をアートと表現する場合もあるだろう。本科目では、アートをも含む広い概念として「文化」を定義し、文化を守り発展させるための政策・事業のあり方、そしてそれを継続的に運営するための枠組みや仕組み、すなわちマネジメントについて学んでいく。文化政策ならびに文化事業の中でも、地方自治体が主体となる範囲の「地域文化」にフォーカスしつつ、人々と文化をつなぐための施策について国内外の事例を検討しながら国際的な視点から考えていきたい。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
環境政策特論	山田 修嗣	環境政策はどのような社会的意味を持つかについて、受講者と考える。環境政策の現場に足を踏み入れ、実習を通じて理解することも含む。扱う内容は、1970年代以降の日本と欧米の環境政策である。まず、政策とは何か、環境とは何か(環境はどのように定義されてきたか)を把握する。加えて、ローカル・リージョナル・グローバルな領域での政策の展開をとらえ、改善対象としての環境(環境がどのように扱われてきたか)を確認する。また、演習という性格上、受講者の実践も不可欠である。そのため、主として自治体レベルでの実習を組み入れる。実習により、政策を企画・実施する現場の視点を得て、いっそうの理解を深める。
サステナブルツーリズム特論	海津 ゆりえ	持続可能な発展=サステナブル・ディベロップメントは21世紀に至る世界が獲得した新たな成長と発展のモデルである。本授業は、サステナビリティの概念と政策や各種産業における取組、および限界について議論し、持続可能な開発の今後の在り方について考える。またツーリズム産業は、個人の旅行を支えるのみならず、広範な産業連関の上に成り立つ裾野の広い産業である一方で、環境や地域社会等に直接的な影響を及ぼすことから「サステナブル・ツーリズム」の概念は避けて通ることができない。講義の後半ではツーリズム産業に焦点を当てる。
国際交通特論	小島 克巳	交通事業では伝統的に料金や参入の面で公的規制が課されてきたが、市場環境の変化に伴い1980年代から欧米を皮切りに規制緩和が進められてきた。そのため、航空などの国際交通における人流や物流を理解するためには、各国の交通政策やそれらの背景を理解することは欠かせない。そこでこの授業では、航空をはじめとする各国の国際交通政策を概観するとともに、交通自由化時代における国際交通のあり方、国際空港などの交通インフラの整備・運営方法といったテーマについて考えていく。
観光行動特論	高井 典子	本授業では、観光者の行動とその背後にある認知的なプロセスを扱う。観光者の一連の行動は「旅行前」「旅行中」「旅行後」という3段階に分けて考えることができ、このプロセスを説明する主要な理論について批判的に考察する。また、ポストモダン社会を象徴する観光行動であると考えられる「アニメ聖地巡礼」「産業観光」「ダーク・ツーリズム」などの現象を社会学やカルチュラル・スタディーズの知見を交えて考察したい。
サービスマネジメント特論	山口 一美	本授業では、観光におけるサービスの品質、計画、マネジメント、人的管理について、先行研究を通して明らかにした上で、その課題について検討をする。授業形態は、毎時間履修者全員が指定された論文を購読し、レジメを作成し、発表、討論を行う。授業計画は、第1回ガイダンス、第2回、第3回旅行者とサービス、第4回、第5回観光におけるサービスの品質とそのマネジメント、第6回～第11回サービスの評価、旅行者満足、再来訪との関わり、第12回～14回で観光と人的管理、サービスマネジメント、第15回総括である。
ツーリズム心理学特論	山口 一美	ツーリズム心理学について、社会心理学と産業・組織心理学の領域を中心にツーリズムを通して人の行動や心の動き、交流がどのように生み出されるか、先行研究を通して明らかにした上で、その課題について検討する。この授業では、毎時間履修者全員が論文を購読し、レジメを作成、発表、討論を行う。授業計画は、第1回ガイダンス、第2回～第5回 観光と心理学、旅行者行動、第6回～9回 観光と旅行者の認知と感情、もてなす人、地域、第10回～第12回 観光とリゾート、祭り、フェスティバル、ニューツーリズム、第13回～14回 観光が人に及ぼす影響、第15回 総括を行う。
グローバル化と言語教育演習	阿野 幸一	本授業では、グローバル化に対応する英語教育改革を機能させるための英語の授業のあり方について考察する。国際社会に対応できる英語によるコミュニケーション能力を身につけるためには、どのような指導計画のもとに授業を設計することで生徒の動機づけを行うことができるか、そしてどのような教授法や教材が英語力を高めるための指導に寄与するかについて検証していく。文献研究にとどまらず、優れた実践を行っている教室を訪問し、授業分析も行うことで、国際社会で求められる言語教育について理解を深めていきたい。
フィールド調査法演習	渡邊 暁子	本授業では、フィールド(現場)に出て社会や文化、自然現象などに触れ、観察や聞き取り調査などを行うことによって、地域の仕組みや成り立ちを学ぶ。フィールド調査を通じて、講義等で学んだ内容を体験的に理解することを目的とする。本授業では、フィールド調査の企画、フィールド調査の実施、フィールド調査のまとめの3つの段階に分かれている。フィールド調査を中心とした調査研究を、実際に一通り完結させることによって、地域調査に必要とされるスキルと心構えを習得することを旨とする。
日本語アカデミック・ライティング演習	野村 美穂子	大学院に進学するほどの留学生であれば当然自分の関心分野に対しては高い問題意識を持っているはずだが、どれほど優れた研究をしていても、修士論文が「読んでも文意がよくわからない」ようなものでは修士課程を無事修了することができない。母語話者でない者が独力で自然な文章表現の論文を書くことが困難なのは当たりまえのことである。この授業では、受講者各自の実際の論文執筆状況に応じて、日本語の表現を徹底的にチェックする。個別指導が基本となる。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
英語プレゼンテーション演習	阿野 幸一	<p>大学院生各自の研究内容について、英語で口頭発表をすることができることをねらいとする。</p> <p>国際学会での共通語は、ほとんどの場合が英語である。それぞれの大学院生の研究成果を社会に発信するためには、効果的に伝える英語によるプレゼンテーション力が欠かすことのできない要素である。本演習では、英語によるプレゼンテーションの組み立て方、発表資料の作成方法などを学ぶとともに、その土台となる英語力の育成も同時に行う。そして、各自の研究内容を英語で伝えるために必要な語彙や表現を学びながら、実際に英語によるプレゼンテーションを行う。</p>
社会調査演習	山田 修嗣	<p>本授業では調査の意義・目的について概説した後、質的・量的なデータを用いる研究方法について、参加者が集めた資料にもとづき演習を行う。参与観察や半構造化インタビューといった質的研究の代表例も扱うが、表計算ソフト等を使った量的データ分析の実習に多くの時間を割くことを予定する。分析スキルの初歩を身につけるねらいから、分布、分散、標準化、検定、相関係数、クロス表、各種グラフなどの作り方や読み方をおさえ、回帰分析ができる程度のレベルを目指す。必要に応じ、PC教室での実習とする。</p>